

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：43103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370451

研究課題名(和文)一つの言語現象としてのワードペア：無意識的に用いられる英語並列表現の認知意味論

研究課題名(英文)A Cognitive Linguistic Approach to English Word Pairs

研究代表者

青木 繁博 (AOKI, Shigehiro)

新潟青陵大学短期大学部・人間総合学科・准教授

研究者番号：10341992

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ワードペアは英語の歴史を通じて広く用いられてきた表現であるが、一様に「慣用句」や「廃れた表現」などとされることも多く、多様な意味や多彩な機能がこれまでに充分論じられてきたとは言えない面がある。本研究はワードペアの包括的な理解を目指して、認知言語学の概念や手法を用いた研究を実施した。具体的に論じた点は、ワードペアの要素である2語の意味関係は決して一様ではないこと、「典型的な」ペアであってもその意味や用法は多様であり、なおかつ変化すること、ワードペアが生まれ、使用され、やがては廃れていくプロセスの明確化、さらにはメタファーやメトニミーといった認知言語学の主要概念とワードペアとの関係などである。

研究成果の概要(英文)：English word pairs, which can be modeled as [A and B], have been used throughout the history of English. Word pairs are often regarded as "fixed" or "set" phrases, and their semantic aspects have not been fully explored. This research clarifies the semantic changes in English word pairs from a historical and cognitive-linguistic perspective. Further, cognitive-linguistic models presented in this research could explain the development of English word pairs. Meaning changes of various types can occur continuously and/or simultaneously in one word pair. Through these changes, some pairs can be converted into a metaphor or metonymy and others may become obsolete.

研究分野：英語学

キーワード：ワードペア 英語並列表現 binomial expressions 認知言語学 認知意味論 中英語散文 意味変化
文体論

1. 研究開始当初の背景

(1) ワードペア (English word pairs あるいは binomials などと呼ばれることも多い、英語並列表現) は、英語の歴史を通じて広く用いられてきた表現であるにも関わらず、特にその意味や意味変化に関しては、これまでに相応の考察が加えられたことはなかったと考えられる。場合によっては一様に「慣用句」あるいは「定型表現」と看做されることから、先行研究においては、実際の使用場面で見られる用例の多様さや表現としての多彩さが適切に捉えられていないと言えるのではないかと。このような発想から、ほとんど無意識的に使われることも多いワードペアは、かえって人の一般的な認知能力に根差している可能性があり、これを認知言語学および認知意味論の観点から考察することを通じて、この「見過ごされてきた表現」の意義をより明確に提示できると考えた。

(2) ワードペアは、これまでの言語学・意味論においては定義付けすら困難であったと考えられる。よく「接続詞 and により結び付けられている」といった定義があげられるが、and 以外の接続詞、すなわち or や but 等が用いられることもあるほか、用例数は少ないがそもそも接続詞自体が使われていないワードペア表現もない訳ではない。本研究では、このように多様性が見られつつも、それでもある程度の類縁性を有するとも言えるワードペアに対して、認知言語学的観点に基づく「家族的類似性」の捉え方をあてはめることによって「一つの言語現象」として扱うことを可能にした。「ワードペアは [A and B] をプロトタイプとし、その周りに集まるゆるやかな集合体である」と捉えて、その全体に対して包括的な理論付けやモデル化を行う道を拓いた。

2. 研究の目的

(1) 「一部の作品におけるワードペア」や「限られた範囲における用例」を考察するだけでなく、包括的なワードペアの理解を目指すことが本研究の第1の目的である。それを実現するために、後述するように複数のコーパスから収集した用例を考察対象としたほか、実際の使用を基盤とする「ボトムアップ」型の考察やモデル化などを進めた。

(2) ワードペアは認知言語学の複数の主要概念と関連している。そうした主要概念の例としては、メタファー、メトニミー、シネクドキ、カテゴリー、プロトタイプ、身体性、視点、方向性、(仮定の)移動、同義性、反義性、多義性、意味のゲシュタルト性などが挙げられる。このことから、認知言語学の考え方をを用いる本研究を通じて、ワードペアその

ものの理解が進むことに加えて、逆に認知言語学の諸概念が問われるといった状況が生じることになる。ワードペア研究自体が、今後さらに認知言語学的なトピックを提供することにも繋がっていくと考えられる。

3. 研究の方法

(1) まず研究の対象としては、「先入観」をなくし、広範な資料からワードペアの用例を収集した。先行研究では、限定された範囲のワードペアのみに考察を加えるといったものも見られ、場合によっては研究者自身もそのようなアプローチを取ることもあるが、それは本研究における方向性とは異なるものである。本研究では、コーパス言語学の手法を用いて、通時的・共時的双方の資料や、異なるジャンルの作品などからできるだけ多様なワードペアの用例を収集し、研究対象として扱うこととした。

(2) ワードペアは、「慣用的に用いられる、同意語からなる定型表現」とされることも多いが、それぞれの点に反対する用例の存在も無視できない。以下にまとめたように、限定された意味あるいは形態の用例に拘ることなく、一見例外的にも思われる例や周縁に位置するような例も含めて整理し分析することで、後述のモデル化等の考察において、より説得力を増すよう心がけた。

- ・慣用表現 その場で作られる、新奇なペアなど
- ・定型表現 通常とは逆の語順の例、間に別の語が入る例や、あえて形を崩して用いられる例など
- ・同意語からなる表現 同意語以外の、反意語や一見関係がないように思われる語句からなるペアなど

(3) 認知言語学の観点から、ワードペアの成立や変化を説明できるモデルを作成した。分析や考察にあたっては、境界の曖昧性や段階性など、認知言語学における基礎的な考え方に基づいて進めるよう心がけた。上述のように、定型と非定型のペアや、同意語からなるペアと同意語以外のペアなど、異なるタイプのワードペア表現の相違点を認めつつ、ある程度連続するものとして、それらを包括するモデルや理論を提示していった。

(4) 以上のような研究方法に加え、複数回の研究発表を通じ、英語においてワードペアはどのように位置付けられるかを問題提起することや、そこで得たフィードバックをモデルや理論の精緻化に適用するといった実践などを通じて、ワードペアの全体像とはどのようなものかに迫った。

4. 研究成果

(1) ワードペアのヴァリエーションに関して考察した。本研究以前の、ワードペアを一樣に「定型」とする見方においては、ワードペアの「ヴァリエーション」という発想は得られなかったであろう。実際には、頻度の高いワードペアであるならばむしろ「逆の語順で用いられる例」や「間に別の語が入る例」など、様々な活用の種類がより多様になるといった傾向が見られる場合もある。本研究では、以下の図のようにワードペアの活用の形をモデル化し、それらの広がり方を明確に把握できるようにした。そして、ペアごとに、あるいは作品・作家ごとに、その広がり方に違いが見られるかを考察した。2014年の研究発表では、後期中英語散文の比較的思想が近いと言われている4作品を対象とし、頻度の高いワードペアについて、どの活用例が見られ、どの活用例が見られないかを作品ごとに明示して比較した。こうしたヴァリエーションの比較から、各作品の文体の特徴の違いについて、ワードペアという一局面ではあるが、実証的に、より明確に論じることができた。結論として、作品や作家ごとのワードペア使用の違いは、経験的な観点から行われた文体研究(いくつかの先行研究)とも平仄が合うことがわかり、ワードペア研究を、諸作品の文体分析における一資料として活用する可能性が広がったと考えられる。

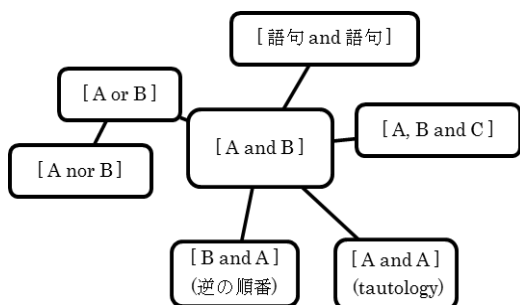


図1. ワードペアの活用形に関するモデル

(2) 2015年の研究発表での中心的な論点はワードペアの意味変化であった。そもそもワードペアの意味が変化することについては、これまで明瞭に議論されてこなかったと言えるのではないかと。ワードペアの意味変化の考察を通じ、あるペアが新たに生み出され、やがて頻繁に使われるようになるが、次第にその頻度を減らし最後には廃語・廃意となるといった「これまで暗黙にはわかっていたプロセス」を、より明確に示すことに繋がった。この研究では *bread and butter* など、どちらかと言えば慣用的な例を中心に考察を進めた。それらのペアの使用例について、通時的に見てどのように意味変化したかを記述し分類した結果、多くのペアにおいて以下の意味変化が生じていることがわかった。

- 1) ペアの要素である単語の意味が、ペアになる前と比較して狭い範囲の意味に限られたり特定の文脈での使用に限定される
- 2) ペアとして用いられるときの品詞が、要素である語の品詞とは異なる場合がある
- 3) 固有名詞からなるペアが一般化し、より広い文脈で用いられることがある
- 4) 字義通りの意味から比喩的な意味へと意味が転じる場合がある

このような意味変化は、見方によっては意味拡張であるということもでき、当該の表現がより汎用的あるいはより発展的に使用されるようになったとポジティブに捉えられるところもある。反面、上記のような異なる種類の意味変化が連続して、あるいはほぼ同時に起こることによって、元の意味が失われるだけでなくその起源すら忘れ去られることになってしまい、ある時点からは加速度的にワードペアが廃語・廃意へと向かっていくこともあると推測される。こうしたプロセスは、過去において既に廃語・廃意となったペアや今あるペアについて言えるだけでなく、現在は頻繁に用いられているペアや、今後生産されるであろうペアなどにもおそらく当てはまり、ほとんどのペアに関して潜在的に同様の変化が起こりうる可能性を示唆していると考えられる。

(3) 研究者自身のものも含め先行研究に見られるワードペアの分類を批判的に精査し、認知言語学の観点に基づく新たな分類を提示した。2016年の論文で、ワードペアはその意味関係に基づき以下の5つのタイプに分類されると示した。

- i) ペアの構成要素である2語の意味が重なっている
- ii) 一方の語の意味がもう一方の語の意味を含んでいる
- iii) 2語の意味が部分的に重なっている
- iv) 2語の意味が隣接している
- v) 何らかの関連性を持つ2語が組み合わされる

しかしこの分類は固定化された区分ではなく、境界には曖昧性があることや、その境界をまたぐような意味変化が生じる場合があることなどを、実例に基づいてモデル化し、明らかにした。以下の図に挙げたものはそうした例の1つで、ワードペアの要素である2語のうち1語の意味に焦点が当たることによって成立したワードペアを示すモデルである。この例では語Aの意味がワードペア全体としての意味形成において主要な役割を果たしているが、この焦点の当たり方や当たる範囲が変わることで、ワードペアが生み出される際や、ワードペアの意味変化が起こる際に、意味の異なるワードペアを成立させている

と考えられる。このモデルでは、焦点の当たり方により、B の意味の方に近い場合や、A と B とを総合した意味になる場合、あるいはそれらからは外れた（一見関係のないような）意味のペアが生まれる場合など、異なるタイプのペアを説明することができる。

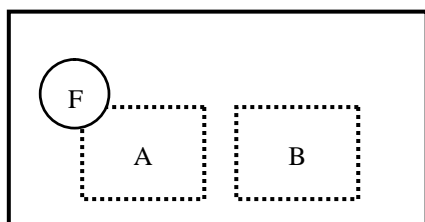


図2 . ワードペアの意味を表すイメージ・スキーマの例 (A, B: ペアの要素 F: 焦点)

(4) メタファーやメトニミーがワードペアと関係する際には多様なあり方が見られる点を実例をもって示した。例えば、複数の論文や研究発表を通じて、ワードペアと比喻表現との関係には以下のようなケースがあることを指摘した。

- ・ワードペアの2語の間にメタファー的な意味関係が存在することがある、あるいはむしろ、メタファー的な意味関係を持つ2語が組み合わされてワードペアが作られることがある
- ・何らかの意味を有していたワードペアが、個々の要素ではなく全体としての意味が比喩的に転換され、別の意味になる場合がある
- ・ワードペアの2語のうち一方の語のみが比喩的な意味に転換されることを経て、結果として2語の意味関係が英語話者にもわからなくなってしまう場合がある
- ・概念メタファーや導管メタファー、身体感覚に基づくメタファーなど、多様なメタファーがワードペアには見られる

さらにメトニミーについては、社名や人名でもって関係する商品・製品等を表すといったメトニミーの一種が、やはりワードペアでも頻繁に見られる点などを例示した。このような観点から、ワードペアとメタファー・メトニミー等については今後も考察すべき余地が残されていると考えられる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

青木繁博、英語ワードペア表現の5つのタイプと意味変化、新潟青陵大学短期大学部研究報告、査読無、第46号、2016、pp.79

青木繁博、特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアのヴァリエーション、新潟青陵大学短期大学部研究報告、査読無、第45号、2015、pp.45 - 55、

<http://hdl.handle.net/10623/50628>

青木繁博、中英語散文におけるワードペアとメタファー：認知言語学的アプローチ、査読無、新潟青陵大学短期大学部研究報告、第44号、2014、pp.1 - 8、

<http://hdl.handle.net/10623/45901>

〔学会発表〕(計4件)

青木繁博、Metonymy or Meronymy? 同意語的でないワードペアについての再考察、日本中世英語英文学会第31回全国大会、2015年12月6日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

青木繁博、*bread and butter* の意味消失：慣用的な英語並列表現が意味変化するプロセスについて、日本認知言語学会第16回全国大会、2015年9月13日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

青木繁博、プロトタイプ理論と *The Shewings of Julian of Norwich* におけるワードペア、日本中世英語英文学会第30回全国大会、2014年12月7日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

青木繁博、ワードペアにおける慣用性、定型性、冗長性、反復性について、日本中世英語英文学会第29回全国大会、2013年12月1日、愛知学院大学日進キャンパス(愛知県日進市)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

青木 繁博 (AOKI, Shigehiro)

新潟青陵大学短期大学部人間総合学科・准教授

研究者番号：10341992